

2016/10/23 全国唯物論研究協会第 39 回大会（立教大学）

テーマ別分科会：「实在論の現在」

報告者：中島新（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

aratanakashima1121@gmail.com

なぜ今「实在論」なのか？

——マルクス・ガブリエルの「新实在論」を例として——

0. はじめに

本報告は、現在ドイツやイタリアで注目を集める「新实在論」、とりわけマルクス・ガブリエルの实在論的立場を検討することで、現在の实在論的潮流を考察する一つの視座を得ることを目的としている。

言語論的転回以降の哲学は、とりわけポストモダン思想と結びつくことによって、相対主義的・構築主義的な側面を強めてきた。その立場は一般的に「反实在論」の系譜に属すると考えられており、差し当たり人間の行為や認識から独立した事物の「实在」を認めない立場がポストモダン思想の特徴だと言えよう。しかしいまやポストモダンをさらに過去のものとする「ポストモダン以降」の思想潮流が現れてきており、「实在論」的転回もそのひとつだとされる¹。「思弁的实在論（唯物論）」、「新实在論」などが属するその流れは、一部では多くの注目を浴び、また一部では既にその衰退が指摘されながらも、「实在論の現在」として語るに値する多くのトピックを含んでいる。

しかしそれらは名称の多様さからも分かるように、今のところまとまった一つの思想運動としてではなく、様々な立場・主張が乱立している状態にある。それらを包括的にひとつの思想運動として理解するためには（あるいは包括的ではないにしても、それぞれの立場を比較検討するためには）、「实在論とは何か」ということを問題にせざるを得ない。現在の多種多様な「实在論」的主張を整理するためには、暫定的にしても、「实在論」というある程度の枠組みを設ける必要があるからである。それにより、この問題に直接答えることは困難だとしても、現在の实在論が置かれている状況やそこで取り上げられる様々なトピックに目を向けることが可能となる。その結果、なぜ現在の思想状況において「实在論」が主張され、また求められているのか、その理由も明らかになるであろう。

本報告ではそうした「实在論の現在」を考察する一つのアプローチとして、マルクス・ガブリエルの唱える「新实在論」の立場を検討したい。ガブリエルはドイツ古典哲学研究を下地としながら、現代哲学の分野においても積極的に発言を行い、实在論的転回における中心人物の一人だと言える。ガブリエルの主張を検討し、彼の「实在論」的立場を明らかにすることで、「实在論の現在」を見通す視座を得ることが本報告の目的となる。

¹ 岡本（2016）はポストモダン以降の思想展開として「自然主義的転回」、「メディア・技術論的転回」、「实在論的転回」の三つの潮流を挙げている。

1. 「新実在論」という思想潮流

ガブリエル自身も言うように、「新実在論」とは「いわゆるポストモダン以降の時代を示す哲学的態度を記述する」(Warum, S.9f.)のものであり、「まず差し当たりはポストモダン以降の時代に対する名称」(Warum, S.10)に過ぎない。そのため、「新実在論」はまずポストモダン以降の実在論的思想潮流に対してガブリエルが与える総称だと言えるだろう。それではここで言われる「ポストモダン」とはいかなる時代状況や思想内容を指しているのだろうか？当然、ポストモダンをどのように理解するか、という問題に関しては様々な意見がありうるし、また現在の実在論の内部において確固とした共通理解があるのでもない。しかしひとまず、カンタン・メイヤス²やマウリツィオ・フェラーリス³、そしてガブリエルによれば、「構築主義（構成主義）Konstruktivismus」、「相対主義 Relativismus」、「相関主義 Korrelationismus」などがポストモダンに属する立場だとされ、総じて「反実在論」の立場と見なされる。図式的に見れば、「反実在論」としてのポストモダン思想を乗り越え、ポストモダン以降の時代の思想として明確に「実在論」を主張する立場が「新実在論」と呼ばれるのである。

ここで強調すべきは、この「新実在論」に属する多くの論者が、「モダン（近代）」そのものにまで遡り、ポストモダンへ至る思想の流れを捉え直す点である。つまり近代思想の内に既にポストモダンの萌芽があることを認め、そこまで議論を遡り批判を展開するという方法を取るのである。例えばメイヤスの批判は「相関主義」に向けられているが、その源流がカントにあることが指摘されている。またフェラーリスは「フーカント（フーコーとカント）」や「デカント（デカルトとカント）」という独特の用語により、ポストモダン（とりわけ構築主義）がそもそも近代における事実問題から権利問題への「コペルニクスの転回」に起源を持つと指摘する。ガブリエルもまたドイツ古典哲学の研究、特にシェリング研究を背景に自身の思想を展開していることから、これら新実在論の旗手は単にポストモダンだけを相手取るのではなく、その萌芽を含む近代まで歴史を遡ることによって、ポストモダンそのものの根本的な批判を企てているといえる⁴。

以下ではガブリエルの実在論的立場について、とりわけポストモダンや（科学的）自然主義に対する（批判的）態度を中心に見ていくことにしたい。

2. ガブリエルの立場（その①） — 「世界は存在しない」

以下ではガブリエル自身が展開する実在論について、その基本的な主張を確認する。ガブ

² フランスの哲学者であり、パリ第一大学教授。一般に「思弁的実在論」のグループに属するとされるが、メイヤスは自身の立場を「思弁的唯物論」としている。

³ イタリアの哲学者であり、ガブリエルと共に「新実在論」の立場に属する。

⁴ ガブリエルは後期シェリングのヘーゲル批判を中心に論じるが、「世界は存在しない」というテーゼはそこで示したシェリングの「事実存在」構造に由来する。シェリング研究と新実在論との関係については拙稿（2016）を参照。

リエルは著作『なぜ世界は存在しないのか』において、「世界は存在しない」というテーゼを掲げる。

私は本書においてある新しい哲学の根本命題を展開する。それはある単純な根本思想、すなわち世界は存在しないという根本思想から出発する。後に見るように、このことはそもそも何も存在しないことを意味するのではない。[...]世界は存在しないという根本命題は他のすべてのものが存在することを含んでいる。(Warum, S.9)

ガブリエルは続けて「二つ目の根本命題」として「新実在論」を提唱するが、まずは一つ目の根本命題である「世界は存在しない」という主張に目を向けよう。

この主張は世界の不在とそれ以外のすべてのものの存在を主張している。ガブリエルも注意を促すように、「世界は存在しない」という主張は他のあらゆるものの存在も否定することではない。むしろガブリエルは「人生の意味」や形而上学的な対象を「幻想」として切っ捨てて捨てるポストモダンにニヒリズムとして捉え、そこに陥ることを批判する。同時に「世界」を除いたすべてのものの存在を肯定することで、哲学史上切り詰められてきた「実在の領域」を回復しようとするのである。

ガブリエルは大きく分けて三つのパースペクティブから現代に至るまで哲学の歴史を考えている。それは「形而上学」から「ポストモダン」へ、そして現代の「新実在論」へと続く流れである。まず形而上学は次のように評価される。

形而上学は、世界全体の理論を展開する試みとして定義されうる。それは世界がわれわれにとってどのように出現・現象するのではなく、世界が現実のうちでどのようにあるのかを記述するとされている。(Warum, S.10)

形而上学の枠組みでは、世界がわれわれに対して本来の姿ではなく、あくまで現象としてのみ現れることが前提されている。つまりわれわれが形而上学において「世界」に言及する場合、われわれの観点に依存しない「事実」や「現実」が念頭に置かれているとされる。現象の背後にある「真の世界」へ迫ろうと試みるのが形而上学の特徴であり、この探求において人間の行為や認識は世界の正しい姿をゆがめる邪魔なものとして取り除かれてしまう。続くポストモダンの思想はそうした形而上学的立場に対して次のように反論するとされる。

われわれにとって現象する諸物のみが存在するのである。そもそもその背後、すなわち世界や現実そのものといったものはもはや存在しないだろう。(Warum, S.11)

形而上学と反対にポストモダン思想はわれわれの認識に関わる物のみが存在を認める。つまりわれわれにとって現象するもののみが存在し、その背後は想定できないか、あるいは想

定できたとしても、われわれの認識の及ばぬこととしてそれ以上追求されない。

ここで興味深いのは、一見形而上学に対立するように見えるポストモダンの思想を、ガブリエルが「形而上学の更なるバリエーション」(Warum, S.11)と見なすことである。彼によれば、ポストモダンにおいては「構築主義」の非常に一般的な形式が問題になっているとされる。

構築主義は次のような想定に基づいている。すなわち、諸事実そのものというのはそもそも存在せず、われわれはむしろ事実をただわれわれの多様な対話や科学的方法によってのみ構成しているのだ、という想定である。(Warum, S.11)

ガブリエルもまた構築主義の伝統的な提唱者としてカントを挙げており、メイヤーやフェラーリスと同様にポストモダン思想の源流に位置づける。ガブリエルによれば、形而上学は現象世界と実在世界を区別し、それに対してカントは現象世界を構成するわれわれの認識能力の限界を定めたとされる。この点を構築主義は引き受け、さらにポストモダンは「われわれはただひとつの眼鏡だけでなく、とても多くの眼鏡をかけている」(Warum, S.13)という点を付け加え、認識の相対化を推し進めたのである。現象と実在を区別する点にガブリエルは形而上学の系譜を見ているのである。そしてガブリエルはポストモダンに対抗する「新実在論」の立場から、こうした流れに対して根本的な反論を企てる。

新実在論はむしろ、われわれは世界がそうあるのと同じように世界を認識することから出発する。当然われわれは勘違いすることもあり、さらに幻想の状態にもある。しかしわれわれがいつでも、あるいはほとんど常に勘違いをしているということにはどうにも同意できない。(Warum, S.13)

ガブリエルは「形而上学」、「構築主義」の主張と「新実在論」を比較することで、自らの立場を明らかにしようとする。ガブリエルは形而上学と構築主義から新実在論を区別する一つの例を挙げており、そこでは「アストリット」という人物と「私」と「読者」がそれぞれヴェスビオ火山を眺めている状況が想定される。その思考実験ではそれぞれの立場において「何が存在するとされるか」が重要な分岐点となる。

- ①形而上学の立場：唯一現実的な対象であるヴェスビオ火山だけが存在する。だれがその火山を見ているかということはその存在にまったく関係しない。
- ②構築主義の立場：三つの対象が存在する。つまりアストリット、私、あなたにとっての火山がそれぞれ存在する。その背後にわれわれが認識できるような対象は存在しない。
- ③新実在論の立場：少なくとも四つの対象が存在する。つまり形而上学と構築主義で主張されたすべての対象が存在する。新実在論は事実に対する思考 Gedanken すら考慮の対象

である事実と同等の権限を持って実在していると想定するのである。

この例によってガブリエルが示すのは、形而上学と構築主義が、現実性を一面的（観察者なしの世界か、観察者の世界かのどちらか）にしか理解せず、現実性を根拠なく簡略化してしまっているという問題である。それに対して新実在論が主張するのは「観察者を伴う mit 世界」(Warum, S.15) である。一見するとこれは構築主義における「観察者の世界」と同じように思えるが、ガブリエルの意図はむしろ、何らかの主体の関与を認めたくえでそれによる事実の基礎付けを否定することに向けられる。つまり形而上学が「私なしに」、構築主義が「私によって」事実が成立すると考える点に対して、新実在論は「共に mit」という事実の成立のあり方を提示するのである。主体と共に事実は成立するが、しかし事実そのものは主体によって構成されたのではなく、端的に事実として成立しているというのが「新実在論」の主張であり、この立場は「旧実在論（形而上学）」や「構築主義」の一面的な現実性理解を根本的に批判している。

3. ガブリエルの立場（その②） — 「新しい存在論」と諸々の論点

⇒次の課題：観察者のいない世界の中に観察者がどのように存在しうるかを説明すること。この課題は本書において「新しい存在論」の導入によって解決される。

→「存在論」は伝統的に「存在者 *Seiende* についての学説」と理解されており、ガブリエルは特に「事実存在 *Existenz* の意味」を探求するものだとする。しかしこの探求が自然科学や物理学によって達成されると考えるのは間違いとされる。それら学問は物質的なものしか扱えないが、物質的でない事実存在もまた存在するのであり、そこで「存在論」が必要となるからである。以下ではガブリエル自身の主張をいくつかの論点にまとめて紹介する。

○諸世界の数多性について

通常、「われわれの行いなしに単純に実在しわれわれを取り巻くものすべての領域」(Warum, S.17) が「世界」だと考えられている。「世界」は一般に（そして自然科学において）「宇宙」と言われる。

→ガブリエルの主張は、「宇宙は存在しない」ということではなく、「宇宙は全体ではない」ということである。「宇宙」は自然科学の対象領域であるが、それは「世界」よりもはるかに小さい。思考の産物も世界には含まれ、「世界についてのわれわれの思考」も世界に属している。したがって捉えきれないほど多くの対象が存在している。そして、その世界は自然科学の対象領域と同一ではない。世界はただ、それがすべてを包括する、あらゆる領域のための領域と見なされる。

→「したがってわれわれがいなくても存在するあらゆる物や事実だけでなく、われわれを伴って mit のみ存在する物や事実も事実存在する領域が世界だとされる」(Warum, S.18)。

⇒しかしすべてを包括する世界というのは存在しない。ガブリエルは世界が存在するとい

う幻想を破壊するとともに、「世界以外のすべては存在する」というテーゼを主張する。つまり、「すべてがすべてと連関する」というのは端的に間違いである。ただし「多くのものが多くのものと連関する」ことはガブリエルも認める。「すべて」が「あらゆる連関を包括する連関」としての「世界」を意味するならば、そうした世界はいまだ見出されていないのではなく、端的に実在しないとされる。

○無より無きもの

ガブリエルは別の観点から再び形而上学、構築主義、新実在論の区別を試みる。

- ①形而上学者の主張：「すべてを包括するひとつの規則が存在する」(Warum, S.21)。
- ②構築主義者の主張：「われわれは規則を認識できない」(Warum, S.21)。つまりわれわれがいかなる幻想を適切だと見なしたいかが問題である。
- ③新実在論の試み：「そうした規則がそもそも存在しうるかどうか」(Warum, S.21)に答えようとする。

形而上学者が主張する「すべてを包括するひとつの規則」とは、物事すべてに共通する法則のことである（「万有引力」や「万物の根源は水である」という主張が良い例であろう）。構築主義者はその有無に関わらず「それは認識できない」とするが、新実在論は改めてそれを問い直している。そのような法則が妥当する領域を「世界」と言い換え、そうした世界が存在しうるかどうかを問うことが新実在論の差し当たりの課題となるのである。

そのうえで、世界が存在しないことが「世界」そのものの定義から明らかにされる。なぜなら「世界」が「存在するすべてのものを含む領域」であるならば、世界自体を「存在する」と言うためには「世界のうちに世界がある」という状態を考えねばならず、しかし世界内に存在する世界は既に「存在するすべてのものを含む領域」ではないため、当初の「世界」は存在するとは言えなくなるからである。

この論証は世界がわれわれの構成物であることを示すためではなく、「実際に存在するかどうか」という当初の問いに忠実に答えるために行われている⁵。しかし「なぜ世界は存在しないのか」を理解するためには「何かが存在する、とは一体何を意味しているのか」を詳細に検討する必要がある。

ガブリエルはそれについて「何かが世界のうちに出現しているときのみ一般に何かが存在している」(Warum, S.22)と答える。「世界のうちにとは言わないまでも、その世界をまさに全体として、つまり一般に生じるものすべてがそこで生じる領域としてわれわれが理解している場合にはそこに何かが存在するとされる」(Warum, S.22)。世界そのものは世界のうちに出現せず、われわれが世界に「ついて über」考えているとき、その世界はわれわ

⁵ ガブリエルはこの論証を冗談めかして次のように述べる。「冷蔵庫にまだバターはあるかと誰かがあなたに尋ねた場合、次のように言うのは奇妙に思える：「ええ、その場合バターと冷蔵庫は本来ただの幻想、すなわち人間の構成物に過ぎません。実際はバターも冷蔵庫もないのです。少なくとも私はそれが存在するかどうかは知りません。けれど召し上がれ！」と」(Warum, S.21f.)。

れが「そこで in」考える世界とは異なっている。それゆえ「世界はむしろ原理的に事実存在できないのであり、なぜなら世界は世界のうちには出現しないからである」(Warum, S.22)。

○「世界の不在」による帰結

①一方でガブリエルは「期待されたほどのものは事実存在しない」(Warum, S.23)とする。これは世界が事実存在しないということを意味しており、とりわけ科学的[学問的]世界像に対して不利な帰結をもたらす。なぜなら「世界は存在しない」が故にそれについての像 Bild も形成されえないからである。ただしこれは科学に限ったことではなく、あらゆる「世界像を形成する学問・思想」に当てはまることでもある。

②「期待されたよりも著しく多くのもの、つまり世界以外のすべてのものは事実存在する」(Warum, S.23)。なぜなら何らかの思考とその思考対象の両方が実在するからである。それは例えば「～は存在しない」という言明であっても、そう述べられている対象の存在を認めることを意味する。「存在しないものはまたすべて存在する—ただしそれらはすべて同じ領域のうちには存在するのではない」(Warum, S.23)。問題は「どこ」にそれがあるのか、ということであり、というのもガブリエルにとって存在はすべて「どこか irgendwo」にあるからである。(ただし「世界」は「どこ」にあるとも言えないので、ここでもやはり例外として扱われる)。

⇒以上の論述を踏まえてガブリエルは自らの目的を「ある新しい実在論的存在論を表明すること」だとする。

4. ガブリエルの立場 (その③) —存在論的実在論⁶あるいは意義領野存在論

これまでの論述から『なぜ世界は存在しないのか』におけるガブリエルの目的が「ある新しい実在論的存在論」の確立にあることが明らかになった。ここではさらにその立場、つまりガブリエルが「意義領野存在論」と呼ぶものが、どのように展開されるのかを確認したい。ガブリエルは論文「実在論的に考えられた事実存在」(『新実在論』所収)において次のように主張する。

それ〔存在論的実在論〕に対して私は新実在論の存在論への適用を提案する。私自身は「新実在論」を一般に、実在的なものに関するわれわれの思考が他のすべてとまったく同じく実在的だという事実の体系的承認だと理解している。実在性は、何かが最大限様態的に強固な諸事実へ埋め込まれているかどうかには関わり無く、たんに諸事実に依存している。この根本理念が存在論へと適用されるならば、私の考えでは、事実存在を实在論的に考える新しい可能性が生じる。(DNR, S.192f.)

⁶ 先に述べた「実在論的存在論」と語は入れ替わっているものの、内容的には同じ立場を指している。彼自身の立場は文脈に応じて様々に言い表されるため、ここでは差し当たり「存在論的実在論」あるいは「意義領野存在論」をガブリエルの立場を示すものとして理解する。

ガブリエルの主張そのものは非常にシンプルであり、われわれの「思考」もまたほかのものと同様に「実在的」だと認めるべきだ、というものである。ただしこの引用部分を理解するためには、これに先立つ議論を追わなくてはならない。順に見ていこう。

まずガブリエルは、「古い形而上学的実在論」について詳細に検討する。この立場は次のように要約される。

古い形而上学的実在論は、われわれが世界をどのように理解するかということから世界そのものはまったくこれ以上なく独立しているという点に存する。(DNR, S.189)

ガブリエルによれば、この立場は現代の「唯物論(物質主義) Materialismus」に受け継がれているとされる。この立場においては「物理学がその事実存在をわれわれに教えたところのもののみが事実存在する」(DNR, S.189) のであり、ガブリエルはその立場を批判する。なぜなら古い形而上学的実在論は、「その事実存在がただ実在論的にしか説明されえない特定の事物や事実の事実存在を、存在論的実在論の必然性と取り違えている」(DNR, S.190) からである。特定の事実の特権化を前提して実在論を主張している点にガブリエルは批判を向けるのである。

これに対してガブリエルは「存在論的実在論」を持ち出すことで古い形而上学的実在論への批判を展開する。この実在論は「最大限様態的に強固」であることを理由とした事実の特権化を「存在論的に無根拠」だと批判する。なぜなら存在論的実在論にとっては、「最低限様態的に強固」とされる人間の思考や意識活動によっても「最大限様態的に強固」な事実が形成可能だからである。つまりわれわれの意識活動・思考は古い形而上学的実在論が特権化する事実と同様の実在性を持つのであり、ある意味で様態上の強弱に関わらず実在性がフラットなものとして想定されることになる。しかしガブリエルによれば、同時に実在論もまた極端な普遍化を行っていると言われる。なぜなら存在論的実在論にとって、意識活動や思考にとって捉えられない事実こそ実在しない対象と見なされるからである。ここでガブリエルは「古い形而上学的実在論」と「存在論的実在論」のそれぞれが陥る一面的な見方を調停しようと試みる。これら論述からガブリエル自身の実在論の立場は次のようにまとめられる。

最大限様態的に強固に特徴づけられねばならない対象領域が存在し、そしてそのことが当てはまらない対象領域もまた存在する。そのことを承認する存在論的実在論がある。(DNR, S.193f.)

こうした洞察をガブリエルは「新しい存在論的実在論」と呼び、いまや自然科学(物質主義)に代表される「最大限様態的に強固な対象領域」と共に、例えばわれわれ人間の「精神」や

「思考」を扱う対象領域もまた存在していると主張する。こうした対象領域の多元性は実在性を特定の対象領域に帰する還元主義に対する一つの抵抗策であり、ガブリエルはフレーゲを参照しながらこの多元性に基づく存在論を「意義領野存在論 Sinnfeldontologie」と名づける。ガブリエルがここでフレーゲを参照する理由は、固有名における「意義 Sinn」と「意味 Bedeutung」の区別に関わっている。フレーゲは固有名が持つふたつの意味、すなわち「意義（対象の与えられ方）」と「意味（指示対象）」を区別しており、ガブリエルは「意義」そのものに実在を認める立場として「意義領野存在論」を構想する。「新しい存在論的実在論」あるいは「意義領野存在論」は新実在論のグループにおいてもとりわけガブリエル自身の実在論的立場を示している。

「新しい存在論的実在論」の根本理念をガブリエルは次のように述べる。

何かがそもそも何かである場合にいつでも妥当する客観的で論理的な形式のみが存在するのではない。純粋に論理的な普遍性はその具体的な表現の外では純粋に同語反復的であり無情報である。それゆえまた現象するものの様々な形式が存在しており、その形式は現象するものと、また存在するものに関する情報判断の可能性がそれによってのみ可能にされうるものと不可分に結び付けられている (DNR, S.195f.)

先の「意義」と「意味」の区別によれば、「意味」とは一義的なものであり、複数の固有名が持つ「同一対象」を指示している。一般的にはこの同一対象こそが「実在」と考えられ、複数の固有名はあくまでその実在の「表現」、すなわちそれ自体で実在することは無いものだとされる。しかしガブリエルは「現象するもの」としてのそれら表現にも実在を認めており、またその形式も多種多様であると述べる。この「現象するものの様々な形式」はいわゆる「対象領域」に該当し、それそのものがまた現象と不可分であり、その対象領域内における存在のあり方を決める要素とも結びついている。つまり対象領域はその対象の現象の仕方に応じて多元的に成立する。このことからガブリエルは対象領域を「意義領野」と結び付けており、対象領域の多元性はまさに「意義」の多元性が保証されることによって説明可能になるのである。

しかしここで強調しておきたいのは、こうした「意義」の多元性がわれわれの認識の複数性に依存してのみ成立する主張をガブリエルが否定しているということである。「意義」はわれわれがそれを知覚しうるかどうかに関わらず「そこにある da sein」とされ、むしろ意義と「事実存在」との結びつきを初めから「反実在論的」に理解することはできないとするのがガブリエルの「意義領野存在論」が持つ重要な論点である。

5. ガブリエルによる「事実存在 Existenz」の定義とその役割

ガブリエルは存在論を「事実存在の意味」について考察する学問だと考える。それではガブリエルの「意義領野存在論」の立場から「事実存在」はどのように主張されるのか。ガブ

リエルは差し当たり「事実存在」を「意義領野に現象するもの」(DNR, S.196)と定義しており、その際に重要なことは、事実存在が意義領野における「場所の申告 Ortangabe」を必ず伴うということである。

事実存在するものは、そこにある Dasein という場所の指示が、何かが出現する意義領野を指し示す場合にそこにある dasein。(DNR, S.196)

先に見た「意義」の成立がわれわれの構成には依存しないという論点がここで具体的な内容を持つ。つまりガブリエルによれば、事実存在が常に意義領野という自身の現象する場所への指示を含むことが「意義領野」の成立を保証しているというのである。それゆえ意義領野に現象するものは必ずしも何らかの知覚や認識を通して現象する必要はなく、そこで現象するものは「特定の仕方与えられうる」(DNR, S.196) ことから個別のものとして事実存在することが可能となる。以上のことからガブリエルは「意義領野存在論」の立場から、「事実存在」を形而上学的な普遍構造としての「本来的特性」としてではなく、「そこで何かが現象する」という「意義領野の特性」として再構成する。

実はこの再構成はガブリエルの主張する「世界は存在しない」というテーゼに密接に関わっている。「意義領野存在論」においてこそ「世界は存在しない」というテーゼは維持されるのである。「もしすべてを包括する意義領野、つまりあらゆる意義領野に当てはまり、現象の一般形式を定義する記述」(DNR, S.197) が存在することになれば、「事実存在」はそこですべての現象の形式を定義する記述としての「本来的特性」と見なされうる。すなわち「事実存在」というあり方が「意義領野において何かが現象する」という世界内部での意義領野の特性であることになる。しかし意義領野の多元性を前提するならば、幾つかの意義領野では何かが現象し、ほかの意義領野では何も現象しないということは当然起こりうる。→もし世界がすべての意義領野を包括する意義領野だとすれば、そこでは「何かがそこに現象する意義領野」と同様に「空虚な意義領野」も現れるはずである。例えば「魔女は存在しない」といった否定的事実存在の言明は空虚な意義領野についての言明である。そこで「非事実存在」というあり方が問題にならざるを得ない。

・もしそうした「すべての意義領野を包括する意義領野」という世界像を描き出すのであれば、次のように主張することになってしまう。

→「われわれは「事実存在」を、「意義領野に何かが現象する」という幾つかの意義領野の本来的特性だと理解する。そして「非事実存在」を、「空虚である」という幾つかの別の意義領野の本来的特性だと理解する」(DNR, S.197)。つまり「事実存在」と「非事実存在」を別の特性として扱う必要が出てくる。それゆえ事実存在の特性を持つ意義領野は「空虚でない」のであり、非事実存在の特性を持つ意義領野は空虚である。

→ただしここで「仮説によって」空虚な意義領野が、すなわち「非事実存在という特性を持

つ意義領野」もまた事実存在する。

・非事実存在する意義領野のこの事実存在はもはや「本来的特性」ではないだろうし、世界自体の特性、つまり「空虚でない」という世界の特性であろう。

→「(自身は)空虚ではなく、空虚でない意義領野と空虚な意義領野を包括する」という特性が世界の「本来的特性」だとしたら、世界は自身の内で空虚な意義領野と並んで現象することになる。つまり「世界は数ある中での一つの意義領野だということになってしまう」。
⇒しかしいまや「すべての意義領野は世界のうちに現象し、そのことによって事実存在する」(DNR, S.197) のだから、もはや世界以外のすべての意義領野が世界のうちに事実存在するのではなくなっている。「世界のうちでの世界の現象」はしたがって他すべての意義領野を無化し、それによりまた自身も無化する。なぜなら「世界はすべての意義領野を包括し、無化するのではない」からである。それゆえ世界は「解釈上の機能」として導入されることしかできないのである。

→意義領野を「事実存在する意義領野」と「事実存在しない意義領野」に分けるために「世界」が導入される場合、(これは「事実存在」を「本来的特性」にすることを意味するが)、事実存在概念は二つの概念に分かれる。なぜなら「世界自体の事実存在」は「意義領野の事実存在」とはまったく異なって機能しなければならなくなるからである。ここに世界の事実存在と意義領野の事実存在の間の断絶が見られる。

○意義領野と世界との断絶

→「意義領野である」という見かけ上最も普遍的な特性は、「独自の意義領野、世界を生み出す」特性と見なすにはあまりに「無規定」すぎる。それゆえわれわれは、事実存在を理解する方法を次のように簡略化することはできない。

→つまり「事実存在しているものの最も普遍的で不可欠の特性、いわば超越論的マトリックス(基質)を探求すること」(Warum, S.198)、「続けて具体的に事実存在しているものに取り組むこと」(Warum, S.198) によってはできない。

○結論

これまで描かれてきた立場は「存在論的実在論」と呼ばれる。この「存在論的実在論」とは、「すべてを包括する領域という想定をせずに済みます」(DNR, S.198) というものであり、先に見たガブリエルの主要テーゼ「世界は存在しない」から、積極的な規定として「その他すべてのものは存在する」へと移行した実在論だと言える。それゆえこの実在論的立場は「多元論」と両立することになり、ガブリエルによれば「存在論的多元論」が成立する。とりわけ「新しい存在論的実在論」は「ローカルな反実在論」の余地を残し、しかし事実存在概念そのものへの反実在論の拡大を禁じている。つまり新しい存在論的実在論は部分的に反実在論の主張(われわれの認識に依存した事実存在)を認めながらも、それと同時に、われわ

れの認識に依存しない事実存在を「意義領野における現象」という形で救い出しているのである。

6. 論点に対する補足

- ・ 科学的事実論：われわれが科学理論や実験器具を用いて物そのものを認識し、ただ構成物を認識するのではないとする理論。
- ・ 自然主義：ただ自然のみが存在し、自然が宇宙と、すなわち自然科学の対象領域と同一だとする主張。
- ・ 物理主義：事実存在するものはすべて宇宙のうちにあり、それゆえ物理学によって探求されうるとする想定。
- ・ 物質主義（唯物論）：事実存在するものはすべて物質的だとする主張。

○略号

- ・ M.Gabriel, *Warum es die Welt nicht gibt*, Ullstein, 2013.:Warum
- ・ M.Gabriel(Hrsg), *Der neue Realismus*, Suhrkamp, 2014.:DNR

○参考文献

- ・ M.Gabriel, *Sinn und Existenz. Eine realistische Ontologie*, Suhrkamp, 2016.
- ・ M.Gabriel, *Ich ist nicht Gehirn. Philosophie des Geistes für das 21. Jahrhundert*, Ullstein, 2015.
- ・ M.Ferraris, *Introduction to new realism*, Bloomsbury, 2015.
- ・ M.Ferraris, *Manifest des neuen Realismus*, Vittorio Klostermann, 2014.
- ・ 岡本裕一郎、『いま世界の哲学者が考えていること』、ダイヤモンド社、2016年。
- ・ スティーヴン・シャヴィロ著、上野俊哉訳『モノたちの宇宙 思弁的事実論とは何か』、河出書房新社、2016年。
- ・ マルクス・ガブリエル/スラヴォイ・ジジェク著、大河内泰樹/斎藤幸平監訳『神話・狂気・哄笑——ドイツ観念論における主体性』、堀之内出版、2015年。
- ・ マルクス・ガブリエル・斎藤幸平訳「中立的な事実論」、『現代思想』vol.44-1、86-105頁、青土社、2016年。
- ・ 中島新、「新事実論とマルクス・ガブリエル—世界の不在と「事実存在」の問題—」、『国際哲学研究』5号、175-186頁、2016年。